

## 寺山遺跡（第 8 次）発掘調査の成果

- 1 調査期間 平成 30 年 7 月 23 日～9 月 6 日
- 2 調査場所 高岡町字寺山 1762 番 1, 1763 番
- 3 調査面積 210 m<sup>2</sup>

### 位置と環境

遺跡が立地するのは鈴鹿川左岸の高位段丘上です。鈴鹿川から、東西両側に谷が入り込み、南に向かって突き出す舌状の台地となっています。

寺山遺跡では、旧石器時代から鎌倉時代までの各時期の遺物の散布が確認されています。また遺跡内には、台地先端に立地する市内でも最大規模の前方後円墳である寺田山 1 号墳をはじめとする寺田山古墳群が分布しています。過去の耕作等で数多くの古墳は削平され、消滅または痕跡状態となっていますが、4, 5, 6, 8 号墳はかろうじて墳丘を留めています。

これまで平成 2～4 年にかけて道路建設に際し発掘調査が実施され、寺田山 7 号墳（円墳）及び墳丘を失った円墳 1 基・方墳 8 基、そして弥生時代中期の竪穴住居多数、飛鳥～奈良時代の竪穴住居・掘立柱建物多数と土器焼成土坑 1 基を確認しました。うち、今回の調査地の西に隣接する調査区においては、飛鳥～奈良時代の掘立柱建物 9 棟、竪穴住居 3 棟、土坑等が確認されています。平成 6 年には当調査地の南隣接地で発掘調査が行われ、7 世紀の墳丘を失った小型の方墳 4 基、飛鳥～奈良時代の竪穴住居 8 棟及び掘立柱建物 17 棟を確認しています。さらに平成 17 年には、遺跡北部で発掘調査が実施され、弥生時代の竪穴住居と奈良時代の豪族居宅の可能性のある掘立柱建物が確認されています。

このように、寺山遺跡では台地の平坦部分のほぼ全域に、弥生時代から奈良時代にかけての遺構が分布しているといえます。今回の調査地周辺においては、飛鳥～奈良時代の掘立柱建物の分布密度が高く、当時の集落の中心地であった可能性があります。

### 主な検出遺構

第 8 次調査で確認した遺構は、掘立柱建物 1 棟、竪穴住居の可能性のある大型土坑 2 基、溝 1 条、柱穴多数です。

#### 掘立柱建物 SB0809

調査区の中央北寄りで見出しました。北側が調査区外へと続くため詳細は不明ですが、東西 2 間、南北 1 間以上を確認しました。東西の柱間の距離は 1.8m で、南北は 1.3m あります。柱穴からは土師器と須恵器の破片が出土したのみで、建物の詳細な時期は不明です。

#### 大型土坑 SX0802

調査区の西側で見出しました。埋土は黒褐色砂礫混シルト層が 5cm 残っているだけで、上部は著しく削平されていました。一部に焼土の痕跡があり、竪穴住居跡の可能性が考えられます。出土物はなく、時期は不明です。

## 大型土坑 SX0806

調査区の東よりで検出しました。埋土は褐灰色砂礫混シルト層でした。不整円形に浅く凹みます。焼土や周壁溝等は確認できず、堅穴住居と断定することはできません。土師器の破片が少量出土したのみで、時期は不明です。

## 溝 SD0807

調査区の東で検出しました。南北方向に伸びる、幅 70cm 程度の溝です。埋土は灰褐色砂礫混シルト層で、深さは 15cm ほどありました。土師器や須恵器の破片の他に、瓦が出土しています。これらの特徴から奈良時代（8 世紀）以降の溝だと考えられます。

## 主な出土遺物

発掘調査によって出土した遺物は整理箱に 3 箱分と少量でした。多くは土師器と須恵器の破片ですが、一部には瓦や石器も確認できました。土師器や須恵器、瓦の多くは飛鳥～奈良時代のもので、概ねその頃を中心とした遺跡といえます。石器は弥生時代以前のものですが、その頃の遺構はないことから、奈良時代頃の遺構に混入したものと考えられます。

## 調査の成果

今回の発掘調査によって、飛鳥から奈良時代（7～8 世紀頃）の遺構や遺物が広がっていることが確認できました。上部の削平が著しく遺跡の残りは悪かった点は残念ですが、掘立柱建物や堅穴住居の可能性のある土坑を確認するなどの成果を得ることができました。

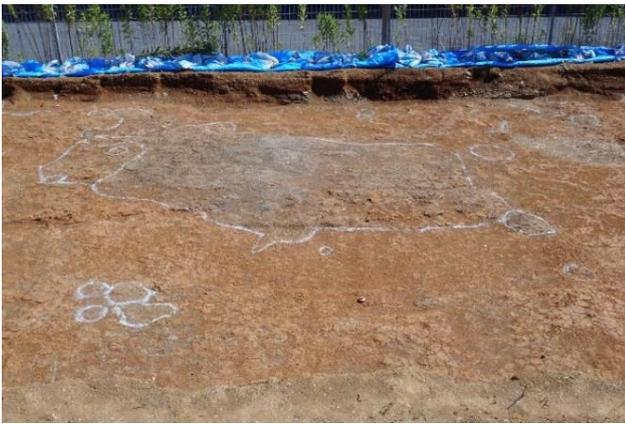
南西側で発掘調査された第 2・3・6 次調査等でも、同じ飛鳥から奈良時代を中心とした遺構や遺物が確認されています。おそらく、周辺には更に広がっていることが想像されます。



検出状況（東から）



完掘全景（東から）



大型土坑 SX0802 検出状況（北から）



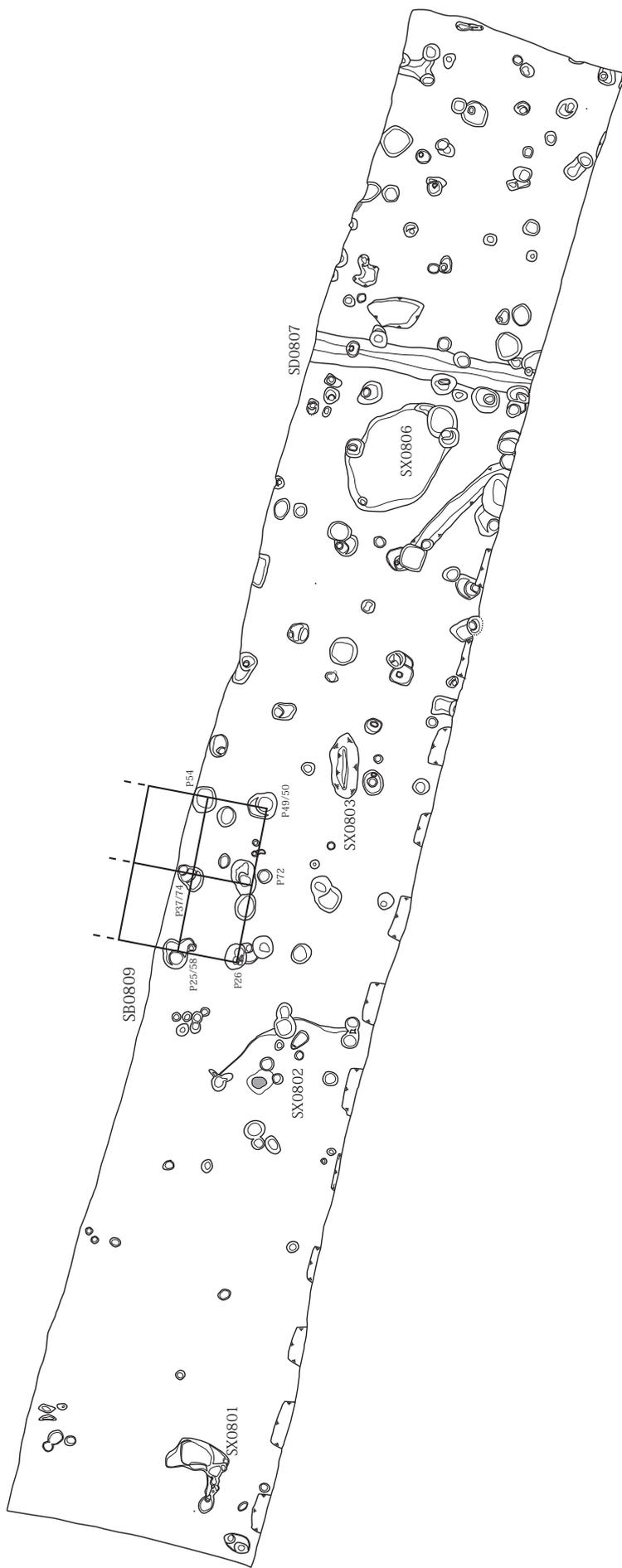
溝 SD0807・大型土坑 SX0806 検出状況（北から）



調査区東寄り北側に焼土（南から）



ピット P103 から瓦出土（北から）



■ 焼土

寺山遺跡（第8次）遺構配置図（S=1/150）